

思春期における悪性腫瘍患者の看護

— 病名を知らされた一症例を通して —

北5階病棟 発表者 宮尾圭恵

I はじめに

悪性腫瘍患者への病名告知は、社会的にもそれが是か否か論議されてきている。当病棟においては、昨年からは四肢の切断を余儀なくされた悪性腫瘍患者には、ある程度事実を告げるという方針がとられるようになった。しかし、その後の心理面への援助が充分行なわれていないのが現状である。

そこで私たちは、悪性腫瘍患者の中でも、特に精神的動揺の大きい思春期の患者を対象に、病名をどのように受けとめていくのか、その過程を見つめながら、かかわりを省りみたい。

II 研究期間

昭和58年4月より昭和59年2月まで

III 研究方法

プロセスレコードをとり、患者の心理状態、看護婦の対応の仕方を分析・評価・考察する。

IV 症例紹介

患者：M子 13才（中学2年生）女性

病名：右大腿骨骨肉腫

性格：一見明るくはきはきしているが、感情の起伏が激しい。

好きな事：走る事（陸上クラブには入っていた。）

経過：昭和58年5月初旬、陸上クラブの練習中、右膝関節痛出現し、膝を屈曲するような準備体操ができなくなる。筋肉の使いすぎと言われ、そのまま放置する。その後も疼痛緩和せず、8月某整形外科受診。X-Pの結果、精査が必要と言われ、長野の総合病院紹介され、その後当科紹介となる。入院時「膝に白い影があり、詳しく検査しなければいけない」と説明されている。諸検査の結果、「骨肉腫」と診断され、8月18日両親に話される。母親は「本人はうすうす気がついている様子だ」と言う。手術前に化学療法（メソトレキセート200mg～250mg/kg）が4回にわたって行なわれる。10月4日手術、右大腿切断術施行、7日より松葉杖歩行開始、13日より3日間化学療法施行される。また、8月25日の肺CTにて肺転移発見されていたが、両親・本人には伏せてあった。10月28日胸部X-Pにて、肺に転移10ヶ以上発見されて初めて両親・本人へ手術が必要だと説明される。11月8日第2外科へ転科、11月14日胸骨正中切開、両肺腫瘍摘出する（右70ヶ、左64ヶ）。24日当科へ転科し、化学療法1回行った後、正月は自宅で過ごす。1月11日X-Pで右肺野下部に白い陰影あり、胸水貯留が認められるが、症状は背部痛のみであったので経過観察となる。予後があまり良くないということで、より多く家庭生活、学校生活を送らせるために早く仮義足が必要となった。

1月17日身障センターにて、仮義足製作され、2月には短期間ではあるが登校した。

肺転移については、現在小康状態である。化学療法については、状態をみながら、3週に1回の割合で1年半から2年行なう予定である。

V プロセスレコードおよび分析

9月27日、切断の手術の説明、医師より両親と本人に「この前の検査（生検）の結果、悪いものであった。化学療法を1ヶ月続けたが、小さくならない。このままだと他へ転移の可能性があるので切断した方が良い。」と説明される。両親はしっかり受けとめ、「おれたちが、おまえの足になるから頑張れ。」とM子を励ます。

プロセスレコードA

9月27日切断の説明をされた時の反応

患者の訴え反応	看護婦の働きかけと対応
(医師の話を泣きながら聞いていた)	①この前、Mちゃんが「いつ手術するの？」と聞いたけど、Mちゃんはどのような手術をしようと思ったの？。
②Kちゃん(※)の話を聞いていたら私と同じ症状だったから、やっぱり（切断の）手術をしなければいけないのかなと思っていた。	③（切断することは前から気がついていたのか……でも実際に医師に言われてどうだったろうか……）それじゃMちゃんは、手術をする気持になったのかな？。
④（泣きながらうなづく）	⑤（了解してくれた、良かった。）これからも大変だけど頑張れるよ。
⑥うんうん（うなづく）	

※K子 15才（中学3年生）女性 右大腿骨腫瘍 切断した後、義足をつけている。現在治療のため入退院をくり返している。

<プロセスレコードの分析>

看護婦は、切断の説明を受けた後、患者がどのように受けとめているのか知りたかったので、このような働きかけをした。同じ年頃で同じ治療をしたK子と友人となり話をしていたこと、前からうすうす気づいていたこともあって、比較的穏やかに受け止めている様子だ。しかし、この場合の対応の仕方として、すぐ「頑張ってるね」という励ましの言葉を出さずに、「手術やこれからの事で、何か心配な事はないかしら？」などという問いかけにすると、もっと心の中のものを引き出せたのではないかと思われる。この時の看護婦には、早くこのつらい場面から逃れたいという気持があった。

プロセスレコードB

9月28日切断の説明の翌日、検温時、自分から話しかけてきた。

患者の訴え反応	看護婦の働きかけと対応
①(寂しそうな顔で)昨日、先生から足を切らなくっちゃいけないと言われたんだ。	②そう、先生から話聞いたの? (さりげなく椅子に腰掛、話を聞く)
③前の写真と、こっちの病院来てから写した写真を見せてもらってびっくりした。先生がこんなに大きくなっていけば、注射(化学療法のこと)だけではくいとめられないんだって、だから足を切らなくっちゃいけないって。(少し涙ぐんでいる)	④そう(同調する)
⑤今日、肺のX-Pとったけど、こっちは(胸に手をあてる)移ってないんだよね(少し心配そう)先生は移ってないってたけどね。	⑥(転移のことを心配しているんだ、何があっても医師を信じて治療を続けてほしい……) 先生がそう言っていたんだから、心配ないよ、先生を信じようね。
⑦2・3日のうちに肺に移ることはないよね、外泊している間とか?。(10月1・2日と学校の文化祭があり、家へ帰る予定になっている。)	⑧家に帰っても病院にいてもそれは同じこと、心配ないよ。それより先生から話されたと思うけど風邪をひかないこと、転ばないことだけ気をつけてね。体調くずさないようにね。
⑨うん(うなづく)	⑩文化祭楽しんできてね。
⑪はい(素直に答える) (話す前よりもすっきりした表情を見せている。)	

<プロセスレコードBの分析>

患者は、切断については納得し、現実をしっかり受けとめつつあるが、肺転移することに不安を感じ、否定してほしいと思っている。看護婦は、肺転移していることを知っているのだから、はっきりと返答できなかったが、このような言葉で対応することにより、患者を安心させている。

プロセスレコードC

10月3日手術前日 消灯時 眠剤の与薬

患者の訴え反応	看護婦の働きかけと対応
<p>②いやだ。(強く言いきっているが、本心ではないようす、看護婦の言葉全部に反抗したい感じ。)</p> <p>④明日から私の人生は、まっくらになるんだ。(大声で冗談ばく言う) (眠剤内服する)</p>	<p>①今晚よく眠れるようにこの薬飲んでね。(薬を床頭台に置く)</p> <p>③(本当に拒否しているのではないと思った。)そんなこと言わずに、明日は良い状態で手術できるようにしなくちゃね。</p> <p>⑤(聞き流す)</p>

<プロセスレコードCの分析>

手術前夜の気持ちを軽さを装った態度で表わしているが、それを手術のことを納得したかのように、看護婦は受けとった。前夜でもあるため、患者をあまり刺激をしないようにそっとしておくという対応をとった。だが、プロセスレコードを評価してみて、患者がまだ、不安を多く残していることを感じた。⑤の対応で黙って聞いたことにより、感情をこれ以上に高ぶらせることにならず、良かったと思う。

10月4日右大腿切断術施行。手術直後から1週間近く痛みの訴えが強く、発作的に大声で泣き出したり、感情をそのまま言葉に出すということが頻繁にあった。このような状況で、看護婦は、苦痛を柔げる看護を中心に行なった。10月6日術後2日目より早期の床上訓練、腹臥位練習を開始した。

プロセスレコードD

10月7日術後3日

患者の訴え反応	看護婦の働きかけと対応
<p>(それまで痛みを訴えていて、どこが痛いのか聞いても返答しなかったが、突然けろっとして言い始める)</p> <p>①ねえ、私の(切断した)あし、どこへ行ったの？。</p> <p>③私の足なんですからね、勝手にどっかへ持って行ってもらっちゃ困りますよ。</p> <p>④私見たいわあ、お母さん見たら気絶するんじゃない？。</p>	<p>②うーん、よくわからないな、N先生に聞いてみるか。(なんと答えてよいかわからなかった。みんなと統一した答をしなれば……と思った。)</p> <p>(母、心配そうに見ている。)</p>

<プロセスレコードDの分析>

術後3日目で、切断について話題にしたことは、私共にとって大きな驚きであった。M子の足に対する思いを考えると、真剣に対応すべきだったと思う。予測しない質問にうろたえてしまい、逃避的な態度をとってしまった。私共の対応として、次の段階へのステップという自立への動機づけとなるような、「あなたの悪いところは、もうとってしまった。新しい足をつけるため、頑張ろうね。」という言葉かけが、必要ではなかっただろうか。

プロセスレコードE

10月11日、術後1週間、この日より理学療法部にて、筋力増強のため、マット運動を行なう。ベッドでも運動できるように、足元の棚に力ひもをつけた時。

患者の訴え反応	看護婦の働きかけと対応
<p>(ひもを握って、理学療法士に指導されたことはせず、左右に振ってもて遊んでいる。母親の言うことを聞かない。)</p> <p>①(母にむかって) いやになったら、このひもで首をしぼるから。。</p> <p>②(同室の患者に) Iさん、このひもで首しぼってあげようか、私喜んでやってあげるよ。</p>	<p>(患者の言葉に、どきっとした。何か言おうと思ったが、言葉が見つからない、そのままようすを見る。)</p> <p>③患者I：私？私はまだ生きていたいからいいよ。</p> <p>④患者A：病院にいる人たちは、よくなると思ってきているから、自殺なんてしないよ。</p> <p>⑤患者T：そうね。自殺するのは、健康な人の方が多いよね。</p>

<プロセスレコードEの分析>

患者は、さまざまな不安で、イライラする感情を内面にとどめておけない。冗談のように言っているが、本気も含まれているように受けとられる。それに対する同室者の励ましは、人生経験のある大人の、心強く、暖かい対応であった。このように患者を支えるのは、同室の患者の力も大きいことがわかる。

プロセスレコードF

10月21日、術後17日 10月12日より松葉杖歩行開始されている。

患者の訴え反応	看護婦の働きかけと対応
	<p>(訪室したとき、元気なさそうだったので声をかけてみる。)</p> <p>①どうしたの？。</p>

② (甘えるように) もういやになっちゃった。
家へ帰りたいよう。

④ やることなくて、暇なんだから。

——中

⑤ (話の途中でふと黙り、じわーっと泣きだす。泣きながら) 今日、売店で、じゃまだから、どいて下さいと言われた。

⑦ 違う、知らない患者さん、そりゃ私みたいなのが行けばじゃまなのは、わかるよ。だけど、どこかへ行かなきゃ出歩くのいやになるし、人と会うのもいやになってしまうから……。エレベーターに乗っても、知らないお婆さんが、足どうしたの? って言うし、小さい子が足ないって言う。

⑨ どうしてみんな、切ないこと言うの? 命を助けるためには、切るしかなかったのに……。

⑪ それは、わかっている。だって本当のことだから仕方ない。学校へ行くこともいやじゃない。いやじゃないけど、もう好きな走れることもできない。クラブに行っても、みんなのタイム測ったりするだけで、私はもう走れない。

③ どうして?

略——

⑥ お店の人に?

⑧ (初めて、好奇の目で見られて、つらかったんだろ
うな) くやしかったんだね。

⑩ 小さい子は、わからないから、言っちゃうんだよ。

⑫ (できるだけ早く自分で、病気に立ち向かえるようになることを援助してあげなければ……。)

Mちゃんは、パラリンピックって知ってる? 不自由な人たちのオリンピックでね、車イスの人が、バスケットやったり、片足の人がスキーやったり、泳いだり、だからMちゃんも、自分でやりたいこと、早くみつけなきゃ、クラブに行って、いろいろやりたい時は、相談にのりますね。

<プロセスレコードFの分析>

勇気を出して、病棟から、はじめて外に出たころ、好奇の視線を受け、現実の壁にぶつかった。患者の気持ちを話させるため、同調する姿勢をとったことが良かった。患者は走れない事の切なさを訴えているが、そのつらい壁を乗り越えようとしていることが、うかがえる。

VI まとめ

今まで、当病棟では、思春期の骨腫瘍の患者には、骨髄炎と病名を偽って話されてきた。私共は、その事実を隠さなければ、いけないという気持ちが先に立った。そのためか、患者への対応がぎこち

なくなり、患者からは、不信感を持たれる原因になっていたと思える。

昨年から診療チームの方針が、悪性腫瘍である事を知らせるようになった。その後、医療チームとして、どのように患者にかかわっていくか、十分な対策もたてられないままに、スタートした。私共は、不安を残したまま、患者を見守る一年であった。

今回は、悪性であると病名を知らされた患者に対して、精神的にどこまで援助できるか、一症例を通して検討してみた。その方法として、プロセスレコードをとることにより、患者の心理の変化や看護婦の対応について考えることができた。患者が自分の思っていることを素直にぶつけてくる性格だったので、考えていることが、把握しやすかった。また看護婦側は、対応の仕方について、暗中模索の中で、何でも聞いてあげようという姿勢が患者に伝わって、患者が、生の声をぶつけてくるという良い結果になったのではないかと思われる。だが、それに対し看護婦は、たびたび言葉に詰まることがあった。

また、患者をとりまく家族や友人、同室の患者たちの言動の中にも、患者にとって、励まし、暖かい心等が数多くあった。このような人達のかかわりの大切さを強く感じた。

この研究の過程で精神的リハビリテーションの必要性について、提案され、作業療法士を含めたチームが結成されつつある。

この症例を通して私共は、どのように患者に接していかなければならないか、より深く考えることができた。

今後、病名告知についての是非は、これからも課題になると思う。

参考文献

- (1) 第14回日本看護学会集録 日本看護協会出版会 1983年
- (2) 堀見太郎・金子仁郎改著 「患者の心理」 金原出版 1940年
- (3) 大段智亮 「面会技師の人間学」 メディカルフレンド社 1965年
- (4) 吉岡昭正遺稿「死の受容」 ガンと向きあった365日 毎日新聞社
- (5) WILLIAMM. EASSON. 著 大阪府立看護短大発達研究グループ訳
「死にゆく子供たち」 医学書院 1982年
- (6) 柏木哲夫 「死にゆく入々のケア」 医学書院 1979年